

# 立命館大学アート・リサーチセンターの板木コレクション

金子 貴昭(立命館大学衣笠総合研究機構 准教授)

E-mail tkaneko@fc.ritsumei.ac.jp

## 1. はじめに

立命館大学アート・リサーチセンター (ARC) は、奈良大学との共同研究として、奈良大学博物館、同図書館が所蔵する板木のデジタルアーカイブに取り組み、2010 年 2 月より「ARC 板木ポータルデータベース」(<https://www.dh-jac.net/db/hangi/>)を公開してきた。また、その活動と合わせて ARC は板木の収集も行い、本稿執筆時点において、コレクションは3,000枚を超える規模に成長している。コレクションに含まれる板木は17世紀以降現代に至るまで、わが国の木版印刷や、それによる出版活動の中で役割を果たしてきた板木である。コレクションは6つのグループから構成されるが、それぞれに性質を異にするため、グループごとに紹介する。なお、本稿では、図版は全て鏡像(左右反転)で掲載する。

## 2. コレクション紹介

### 2-1. 京都・藤井文政堂旧蔵板木

文政年間(1818~1830)に京都で創業した板元・山城屋佐兵衛は、現在京都市中京区寺町五条で古書籍商・藤井文政堂として営業が続いている。藤井文政堂は山城屋の板木約800枚を所蔵しており<sup>1)</sup>、それらも冒頭に述べたデータベースで閲覧が可能である。しかし、現存に至る過程で多くの板木が流出した。その経緯は、すでに永井一彰氏の詳細な報告が備わるため<sup>2)</sup>、本稿ではわずかに情報を補うが、簡略にとどめる。

山城屋の板木は、昭和23年(1948)頃に文政堂店主の関与なく流出し、木材としての再利用に向けて木工店の所有するところとなった。昭和30年代に、近鉄百貨店京都店で開催された印章業組合の大会に際して展示が行われ、印判師の仕事と関連があるとして、木工店が所有する一部の板木が出展された。展示後、それらの板木はN印章店、M印章店、Y印章店の3店が所有することとなった<sup>3)</sup>。その時点においても、木工店には大量の板木が残ったが、それらは平成9年(1997)になって古書籍商・大書堂が買い取るに至った。大書堂に渡った後、それらは永井氏が所属する奈良大学に600枚、大谷大学に600枚が所蔵されることと

なった。

大書堂を経由した板木は永井氏による調査が進められ、その過程で3店が所有する板木も同氏によって調査されたが<sup>4)</sup>、それらは学術機関に収蔵されることなく3店に残った。奈良大学の所蔵に帰した板木は、冒頭に記した共同研究によってデジタル化・公開されており、板木とともに出版記録が備わる重要資料として活用されている。一方、3店の所有分は、伝存が確認されているにもかかわらず、奈良大学所蔵板木と同じ組上で扱えない研究上の不便さや、散逸が進む危険を考慮し、2016~2021年度にかけてARCが3店から譲渡を受けた。結果として、所蔵機関は分かれてしまったが、これらの板木はオンラインデータベース上で同列に扱うことが可能になった。ARCが所蔵するのはN店分が157枚、M店分が39枚、Y店分が10枚であり、仏書、通史、茶の湯、占術、読本、漢詩、和歌、俳諧などジャンルは多岐にわたる。とりわけ、永井氏の調査当時に新聞報道もなされた安永7年(1778)『奥細道菅菰抄』の板木(arcMD01-0714)が有名<sup>5)</sup>である。

### 2-2. 佐藤章太郎商店旧蔵板木

佐藤章太郎は、京都の浮世絵商として、浮世絵などの収集家として、浮世絵研究家として著名である。また、海外に所蔵されていた未刊の板下絵をもとに、北斎や広重の作品を制作した実績のあること、さらには京都を本拠地とする新版画の板元として、東京の渡辺庄三郎と双璧をなす存在であったことも周知の事実である。ARCは、その佐藤章太郎商店の旧蔵板木344枚を所蔵している。

佐藤章太郎商店の板木について、山尾剛氏は、

西春さんがお店を開いたのは大正末だと思います。西春さんは、当時京都で新版画を刊行していた佐藤章太郎さんにも教えを受けていました。佐藤さんが版画の制作を止めた後、その版木を全部西春さんが引き取ったと聞いています。(中略)佐藤章太郎商店が大正末に出した新版画についての詳細なリストはできていないと思います。吉川観方と三木翠山が最も多く、十余点ずつ、ほかに山田美稲さんやら何人かお出しになっていますが、姓

も分かっている人もいないような状態です。<sup>6)</sup>

と証言しており、詳細な経緯は不明ながら、ARC が収蔵する以前の一時期に、浮世絵商・西春のもとに保管されていたことがうかがえる。

ARC が所蔵する板木には、大正 14 年(1925)2 月の吉川観方『観方創作版画 第壹集』5 点(「成駒屋の紙治 河庄の場」欠、[arcMD01-0974](#)、[0975](#)、[0976](#)、[0977](#)、[0978](#)、図 1)、同年 4 月の三木翠山『新撰京都名所 第壹集』5 枚(「大文字の夜の木屋町」欠、[arcMD01-0980](#)、[0981](#)、[0982](#)、[0983](#)、[0988](#))、同じく『第貳集』の 6 枚([arcMD01-0979](#)、[0985](#)、[0987](#)、[0989](#)、[0991](#))、昭和 5 年(1930)の野村芳光『京洛名所』6 枚([arcMD01-0992](#)、[0993](#)、[0995](#)、[0996](#)、[0997](#)、[0998](#))が含まれる。シリーズ物以外の板木では、観方「大和橋の雪晴」([arcMD01-0970](#))、「円山の夜桜」([arcMD01-0971](#))、「三条大橋の朝霞」([arcMD01-0972](#))、「(初代中村鴈治郎の紙屋治兵衛)」([arcMD01-0973](#))、翠山「御苑内雪の暁」([arcMD01-0984](#))、「御室の桜」([arcMD01-0985](#))、芳光「京洛名所 二条橋より大文字を望む」([arcMD01-0994](#))、峯内光雪「祇園の夜桜」([arcMD01-1001](#))、池田虹影「(鴛鴦)」([arcMD01-1003](#))、同「(鳩)」([arcMD01-1005](#))、よしぢ「長良川鶺鴒」([arcMD01-1002](#))などがある。

なお、佐藤章太郎は、大正 9 年(1920)に北斎「百人一首うばがえとき」の板下絵 4 枚を入手し<sup>7)</sup>、翌年にそれを元にした版画を制作した。また、昭和 3 年(1928)には、フランスのエミール・ジャワールが所蔵していた板下絵を元に、初代広重「東都雪見八景」(全 8 枚)を刊行したが、板下絵を元にしたこれらの版画の板木は、ARC 所蔵板木には含まれない<sup>8)</sup>。

先の山尾氏の指摘のように、佐藤章太郎商店の版画制作の全貌は詳らかになっていない。加えて、佐藤章太郎の経歴については岩切信一郎氏の論考が備わるが<sup>9)</sup>、生没年や活動履歴を含めて、いまだ不明な点も多い。ARC に佐藤章太郎商店の旧蔵板木が収蔵されたことは、同商店の活動の全貌を捉える格好の契機となり得るし、京都の新版画の彫摺の特徴を板木から追うための特級資料として位置づけられよう。



図 1 『観方創作版画第壹集』「雛三」板木(主板)  
ARC 所蔵、[arcMD01-0977-01](#)

### 2-3. 浅井勇助旧蔵板木

浅井勇助(浅井泰山堂)は、明治から戦前にかけて活動した大阪の書肆である。浅井収氏が、

祖父、浅井勇助は明治十四年福井県武生市に生まれ、十三歳のとき大阪に出て心齋橋の書肆に奉公し十九歳で独立、「浅井泰山堂」を開き、書店経営のかたわら失われゆく錦絵の蒐集、保存と、その研究につとめました。<sup>10)</sup>

と紹介するとおり、収集した浮世絵は「浅井コレクション」として現在まで伝わる他<sup>11)</sup>、『近世錦絵世相史』<sup>12)</sup>をはじめとする浮世絵研究の成果も残る。出版業については、戦前に複数書籍の板元となっていることを確認できるが、以下に述べる板木の内容から、木版画や木版複製画の制作もさかんに行っていたと考えられる。

ARC が所蔵する浅井勇助旧蔵板木に、大正 7~9 年(1918~1920)に刊行された谷口桃僊画『能楽画譜』の板木がある<sup>13)</sup>。袋や目録、奥付の板木は現存しないが、『能楽画譜』の袋の裏面(ARC 所蔵、[arcUP6365](#))にある奥付には、「浅井勇助」「浅井泰山堂書店」の名が見えることから、これらの板木は浅井勇助の旧蔵と見て差し支えない。ARC には 43 図の板木があり、奈良大学図書館にも「正尊」の板木 1 組([2535789](#))が所蔵され、個人所蔵資料にも『能楽画譜』の板木数組を確認できるため、板木は全 100 図のおよそ半数が現存することになる。

奈良大学図書館には、浅井泰山堂の名前を確認できる板木がもう一種ある。初代歌川広重の「東海道五拾三次」(佐野屋喜兵衛版、通称「狂歌入東海道五十三次」)の複製版の板木である。その目録の板木([2666311](#))には「大阪市北区東梅田町二〇番地 発行者 浅井勇助」「大阪市北区東梅田町 発売所 泰山堂書房」とある。このシリーズの各図には、極印とともに、丸に「一」の字の印が彫られており、浅井勇助はこの印を板元印として用いていたと考えられる。



図 2  
(左)歌麿「(衝立の上下)」板木(主板、複製)、  
ARC 所蔵、[arcMD01-0705-01](#)  
(右)板元印部分拡大

この板元印をもとに、その他の板木に目を向ければ、奈良大学図書館所蔵分では式麿「今容女歌仙 若松内緑木」(2535680)、豊信「(佐野川市松)」(2535748)、栄水「松ばや内 喜瀬川」(2535573)の他、西川祐信『絵本常盤草』の構図を流用して錦絵仕立てとした3組の板木<sup>14)</sup>(2535268、2535342、2535417)に同一の板元印を確認できる(いずれも複製)。ARC所蔵分では、『能楽画譜』の板木と同時に収蔵した歌麿「(衝立の上下)」(arcMD01-0705、図2)、歌麿「江戸町一丁目 松葉屋内 瀬川 たけの さゝの」(arcMD01-0706)、歌麿「婦人手業拾二工(伸子張)」(arcMD01-0708)、文調「(市川八百蔵 瀬川菊之丞 鷺娘相合傘)」(arcMD01-0711)に、この板元印を確認できる(いずれも複製)。

奈良大学図書館所蔵分は「平成六・七年ごろに京都の大書堂に大量の浮世絵復刻版が出ているのを見て、図書館収蔵資料として五〇〇枚ほどを一括購入した」とされる中の一部である<sup>15)</sup>。ARCへの当該板木群の収蔵は2017～2018年にかけてであり、時期もルートも全く異なる。しかし、上記の整理に基づけば、奈良大学図書館・ARCの双方の板木群は、かつて浅井勇助の手もとにあったことはほぼ間違いなく、これらもオンライン上で組み合わせて考察すべき板木である。

#### 2-4. 5代目高橋新治郎旧蔵板木

5代目高橋新治郎(1929～2004)は、東京都文京区の神田川沿いに工房を構えた摺師である。初代から3代目までは高橋倉之助を名乗ったが、新治郎は3代目倉之助の門人・高橋春正(4代目)の実子であり<sup>16)</sup>、写楽作品の復刻などの業績を残した。高橋新治郎の没後、ご遺族の意向により、2011年にその大部分にあたる約1,600枚がARCに寄贈された。

寄贈された板木の特徴としては、正方形に近い形状の板木が多いことがあげられる。したがって、色紙画の板木とも考えられるが、板木に対応する摺り上がりを見出すことが容易でなく、断定できない。また、それらの中に、色紙画の板木に形状が似る団扇絵の板木が相応に含まれていることにも注意が必要である。さらに、著名な画家の落款を確認できる板木が比較的多い点も特徴としてあげられる。例をあげれば、川崎小虎、近藤浩一路、柴田是真、堂本印象、徳岡神泉、西沢笛畝、橋本関雪、松林桂月、森月城、山口華陽、山口蓬春などである。

板木には、しばしば著名な和紙舗の名が見える。先にふれた団扇絵の板木にも、この和紙舗との関連がうかがえるものがある(図3)。和紙舗と寄贈板木との関連性を考慮すれば、寄贈板木に熨斗などの板木が含まれることも理解しやすくなる。

寄贈板木には、料亭、待合、旅館、仕出し店などの掛紙や、呉服店の展示会案内の板木も多く見られる。近代以降、これらの印刷は徐々に機械印刷へと切り替

わり、木版手摺りによるものは淘汰されていくと考えられるが、これらの板木はその最終段階あたりを物語る存在である。



図3 和紙舗との関連がうかがわれる団扇絵板木  
ARC所蔵、[arcMD01-0096-01](#)



図4 (左)橋本関雪「(山家の雪)」板木(色板)  
ARC所蔵、[arcMD01-0137-04](#)  
(右)「鉄道省」印記部分拡大

本節冒頭に述べたように、摺り上がりとの照合ができていないため、現時点では、寄贈板木の成立時期を見定めることは難しいが、先に提示した団扇絵板木のセット中には昭和元年(1926)5月の墨書がある([arcMD01-0096-06](#))。それ以外にヒントを与えてくれるのが、戦前に存在した鉄道省の印記が彫り込まれた板木の存在である(図4)。これらの板木は、鉄道省が取り組んだ海外からの観光誘致<sup>17)</sup>や国内沿線観光には直結しない絵柄であり、その位置づけもまた即断できないが、少なくとも寄贈板木に戦前に成立した板木を多分に含むことを示唆しているだろう。

#### 2-5. さくら井や旧蔵板木

京都・三条新京極で営業していたさくら井屋の活動は、天保13年～嘉永4年(1842～1851)の間に改名した板元・絵草紙屋の桜井屋治兵衛に遡る<sup>18)</sup>。明治28年に三条新京極の土地に移った後、絵草紙からお土産品の販売に比重を移したとされているが<sup>19)</sup>、取り扱い商品としては、木版による絵封筒、便せん、絵は

がき、カード、葉などが知られており、木版の紙製品を主力とする和雑貨店と位置づけるのが適切と考えられる。ARC は、さくら井屋が 2011 年 1 月 15 日に閉店した後<sup>20)</sup>、その旧蔵板木 255 枚を収蔵した。

ARC 収蔵板木には、舞妓(図 5)、京都の三大祭(祇園祭・時代祭・葵祭)、京都の名所に関わるものを中心に、絵封筒や便せん、絵はがき、千代紙(図 6)などの板木が含まれるが、江戸時代以来の絵草紙の板木は含まれない。さくら井屋といえば、画家・図案家であった小林かいち作品が一番に想起されるかもしれないが、小林かいちの印章が彫り込まれた板木は確認できない。また、例えば ARC に収蔵した板木に見られる舞妓の姿は、かいち作品に見られる流麗で瀟灑な体軀ではないように(図 5)、ただちにかいち作品の板木と認定できるものは含まれていないように見受けられる。



(左) 図 5 「(舞妓)」(ぼち袋か)板木(主板)、ARC 所蔵、[arcMD01-0617-01](#)、部分

(右) 図 6 千代紙「(鬘)」板木(主板)、ARC 所蔵、[arcMD01-0596-01](#)

個々の板木の成立年代を特定することはできないが、板木上に昭和 2 年(1927)に登録された、提灯を配した商標<sup>21)</sup>が見られること(図 7)、かいち作品の板木を含んでいないと考えられることなどから、昭和以降に成立した板木がほとんどを占めると推定する。上述のように、重要な一部を欠くと言わざるを得ないが、昭和から現代に至るまで支持を獲得し続けた和様の木版を語る板木である。本や絵画とは異なり、消費されてゆく紙製品の原物保存は困難



図 7 さくら井屋商標板木  
ARC 所蔵、[arcMD01-0639-03](#)、部分

であるが、それらが板木という形で保存されている点にも価値が認められる。さらには、木版印刷の現代的需要を語るコレクションとしても重要な位置を占めると言えよう。

## 2-6. 個別収集板木

本節では、まとまったコレクションとして収蔵したものではなく、個別の機会に収蔵した板木について述べる。

ARC は、錦絵の主板 3 枚を所蔵する他<sup>22)</sup>、細判合羽摺の板木 1 枚を所蔵する([arcMD01-0963](#)、図 8)。合羽摺は、版摺りによる重ね摺りとは異なり、一部を切り抜いた渋紙を当てて刷毛で着色する手法であり、いわゆる色板は存在せず、板木上に重ね摺り用の見当は彫り込まれていない。細判合羽摺の主板に関わる現存情報は寡聞にして聞かず、ARC 所蔵板木は極めて稀少な現存例として注目すべきである。また、近代版画の板木として、徳力富吉郎の昭和 11 年(1936)『京洛三十題』のうち、「陶工六兵エの家」([arcMD01-0661](#))、「時代祭」([arcMD01-0662](#))、「新京極」([arcMD01-0965](#))、「顔見せ」([arcMD01-0967](#))の 4 図なども所蔵している(ただし、色板は不揃い)。

板本の板木は、個別に収集したゆえにまとまりを欠くが、中には奈良大学博物館や藤井文政堂が所蔵する板木に関わるものが含まれる。例えば、嘉永 6 年(1853)『酔古堂剣掃』([arcMD01-0001](#)、グループ番号 [T1031](#))、同年『山陽詩註』([arcMD01-0006](#)、グループ番号 [T2085](#))は、奈良大学博物館が所蔵する佐々木惣四郎(竹苞書楼)旧蔵板木とセットになる板木である。同じく ARC が所蔵する享和元年(1801)『家相図説大全』([arcMD01-0003](#)、グループ番号 [F0039](#))、文化 14 年(1817)『古易占病軌範』([arcMD01-0002](#)、グループ番号 [Ftuika0007](#))、明治 22~25 年(1889~1892)『阿毘達磨俱舍論校註』([arcMD01-0014](#)、グループ番号 [N0607](#))は、藤井文政堂所蔵・旧蔵板木とセットになる<sup>23)</sup>。刊年不詳『星巖集』([arcMD01-0010~0013](#))、明治 13 年(1880)『新居帖解』([arcMD01-0009](#))は、佐々木惣四郎の蔵板目録にその名が見えるものの<sup>24)</sup>、奈良大学所蔵板木には含まれていない。以上の整理に基づけば、ARC 所蔵板木は、奈良大学所蔵板木と同じく、佐々木惣四郎または藤井文政堂旧蔵であるという判



図 8 長秀「あふみやくま」  
(細判合羽摺)板木  
ARC 所蔵、[arcMD01-0963](#)

断も可能である。しかし、江戸時代以来、相合板(複数板元による共同出版)の慣習があり、それに応じて板木も各板元に分散して所有する方法が近代以降も継続していたことを考えれば、安易な断定は避けるべきである。

例えば、先にあげた『酔古堂剣掃』は、佐々木惣四郎の蔵板目録『板木分配帳』(明治7年3月、奈良大学図書館所蔵)に「酔古堂剣掃 四枚」とあり、『蔵板員数』に、他板元との板木交換で枚数が増加した旨が記述され<sup>25)</sup>、それに応じて『蔵板員数帳』(昭和8年7月、奈良大学図書館所蔵)では「酔古堂剣掃 十枚」と蔵板数が増加する。奈良大学博物館が現蔵する同書の板木は8枚、ARC所蔵板木は1枚であり、順当な推測では、ARC所蔵板木は佐々木惣四郎旧蔵であるかに見える。しかし、板木10枚では『酔古堂剣掃』の全丁を摺るには全く不足であり、同書には、例えば山田茂助(聖華房)の奥付を持つ同板本が確認でき(ARC所蔵、[arcBK03-0066](#))、山田茂助が所有していた板木群が解体され、1996年頃から山田茂助の板木が古書市場に流通したことをも考慮すれば<sup>26)</sup>、確定的根拠を得ない限り、こうした板木の旧蔵板元を確定することは困難であり、慎重な判断が求められよう。

### 3. おわりに

本稿では、ARCが所蔵する板木コレクションを紹介した。今後、2-5節までに紹介したような、まとまった形で板木コレクションが出現することは期待しづらいが、2-6節に述べた個別収集板木は現在進行形で拡充している。それらは今後も「板木ポータルデータベース」から随時公開する。なお、データベース公開は行っているものの、調査が追いついていない点が多々あり、データが十分に整備できているとはいえない状態である。データおよび本稿について、ご批正を賜れば幸いです。

#### [注]

- 1) 近時、奈良大学博物館への移管が予定されていると聞く。
- 2) 永井一彰「京都と古典文学—出版を中心に—」(『板木は語る』、笠間書院、2014年)
- 3) 永井氏は2)などにおいて、N氏、Y氏の表記を用いているが、M店、Y店ともにY氏であり、混乱を避けるため、本稿ではN店、M店、Y店と表記した。
- 4) 調査結果は、永井一彰「藤井文政堂旧蔵・現蔵板木目録 付. その他の板木」(『板木の諸相』、青裳堂書店、2021年)にリスト化されている。

- 5) 「『奥の細道』注釈 最古の板木」(朝日新聞、1999年12月4日付)の他、各紙に報道された。また、当該版木に関する論考には永井一彰「『奥の細道菅菰抄』の板木」(『板木は語る』、笠間書院、2014年)、金子貴昭「『奥の細道菅菰抄』の板木再考」(『俳文学研究』、71号、2019年)がある。
- 6) 山尾剛「浮世絵商今昔 京都の浮世絵商について」(『浮世絵芸術』、164号、2012)
- 7) 佐藤章太郎「北斎百人一首うばがゑとき未開版々々下四拾種」(『浮世絵界』、1巻9号、1936年)
- 8) 「東都雪見八景」の板木は、昭和22年(1947)に芸艸堂が求版し、現在は美術書出版株式会社芸艸堂が所有する(早光照子氏の示教による)。なお、ARC所蔵板木には、長秀の細判合羽摺「嵐吉三郎」(柏宗板)の複製板木(縮画)が含まれる([arcMD01-1007-04](#))。ただし、この複製は合羽摺ではなく、板木の裏面が色板になっている。
- 9) 岩切信一郎「版元・佐藤章太郎の出版—京都からの新版画運動—」(『一寸』、39号、2009年)
- 10) 浅井収「錦絵随想 8 浅井勇助と幕末明治の錦絵」(小西四郎『錦絵 幕末明治の歴史 第七巻』付録、講談社、1977年)
- 11) 現在、株式会社クールアート東京によって管理されている。<https://coolarttokyo.com/>(2022年9月30日閲覧)
- 12) 浅井勇助編『近世錦絵世相史』(全8巻、平凡社、1935~1936年)
- 13) 袋入で第一集から第十二集まで刊行された後(ARC所蔵、[arcUP6365~6476](#))、大正10年(1921)に画帖4冊仕立てが発行されている(ARC所蔵、[arcBK06-0021](#))。また、少なくとも「生田敦盛」「班女」の2冊が「故谷口桃僊遺稿」として、独立して発売されている(ARC所蔵、[arcUP4141~4142](#))。
- 14) 奈良大学博物館編『奈良大学博物館企画展 板木さまざま〜芭蕉・蕪村・秋成・一茶も勢ぞろい〜』(奈良大学博物館、2013年)
- 15) 2)と同書の「あとがき」。
- 16) 土井利一・後藤憲二編『彫摺工系譜 本文』(青裳堂書店、2019年)に「高橋春正弟子」とある。
- 17) 小山周子「版画と日本観光の誘致について 川瀬巴水の鉄道省ポスターの制作」(『浮世絵芸術』、151号、2006年)は、鉄道省が観光誘致に関連して木版ポスターを製作した事例を紹介している。他にも、木版画や絵葉書の製作例を確認できる。

- 18) 鈴木俊幸「京都の絵草紙屋和久屋治兵衛・桜井屋治兵衛」(『書籍流通史料論 序説』、勉誠出版、2012年)
- 19) 京都書肆編纂史編集委員会編『出版文化の源流 京都書肆変遷史』(京都書店商業組合、1993年)
- 20) 閉店については、小林丈広・高木博志・三枝暁子『京都の歴史を歩く』(岩波書店、2016年)や21)にあげる文献が、閉店時の貼り紙の記載文を引用する。
- 21) 生田誠・石川桂子『小林かいち 乙女デコ・京都モダンのデザイナー』(河出書房新社、2013年)。ただし、昭和2年以前に用いられていたスタイルの商標を持つ板木も存在する([arcMD01-0608-02](#))。
- 22) 金子貴昭「浮世絵研究における板木研究の課題」(『美術フォーラム 21』、34号、2016年)
- 23) ARC は、arcMD01-0014 以外にも『阿毘達磨俱舍論校註』の板木を所蔵している(arcMD01-0847～0850、arcMD01-0895～0896、arcMD01-0904～0905、arcMD01-0917)。グループ番号 [N0607](#) 参照。arcMD01-0014 以外の板木はN店、M店旧蔵であり、来歴が明確である(藤井文政堂旧蔵)。
- 24) 『蔵板員数』(永井一彰『藤井文政堂板木売買文書』、青裳堂書店、2009年)にそれぞれ下記の記載がある。
- 一 星巖集 丸
    - 二丁張
    - 本文四百廿五丁
    - 大正二年六月大坂板木市買
    - 代金大エ百円
    - 大正三年補刻料〔四拾六円七十六銭〕
    - 五拾円九十四銭
  - 一 新居帖解 丸
    - 二丁張十九枚
    - 右大正二年六月大坂板木市買
    - 代大フ円
- 25) 24)と同書。下記の記載がある。
- 〔一 因果経和談図会 二丁張六枚 相合〕
  - ☆大正九年九月廿八日菱友江醉古堂剣掃
  - ノ板ト交換ス
- 26) 中野三敏・市古夏生・鈴木俊幸・高木元「座談会・江戸の出版(上)―「板本」をめぐる諸問題」(『江戸文学』、15号、ペリかん社、1996年)